示現寺は、曹洞宗総持寺の末山。永和元年（一三七五）に新潟県出雲崎出身の玄翁が再興。応永二年（一三九五）那須の温泉で湯治をしていた時、九尾の狐を退治。毒石の殺生石が、全国に散らばったという。本堂裏に、その石がある。その時使用したのが和尚由来の「玄翁」である。

喜多方市小田付の家跡

今年は没後一二〇年
伝えたい瓜生岩子の功績

文政十二年（一八二九）二月十五日～
明治三十年（一八九七）四月十九日

石田明夫

いつも質素な木綿を着て、穏やかな表情で話し、「自分ばかり良くなっては何もならぬと思うのス」と答えたという瓜生岩子（イワ）。幕末から明治時代にかけ日本最初の社会福祉に生涯をささげた慈善活動家の女性。女性初の藍綬褒章を授章。女性初の銅像となった人です。

戸籍上小田付、熱塩温泉山形屋で生まれる

岩子の母りえは、文政九年（一八二六）喜多方小田付の油問屋「若狭屋油屋、渡部（邊）利左衛門へ十七歳で嫁ぐ。利左衛門には、異母妹がいて婿をもらい山形に支店を出すほどだった。そして、文政十二年（一八二九）二月十五日、母の実家であった熱塩の瓜生家（山形屋）で岩子が誕生した。戸籍上は小田付。翌年には、弟半治（はんじ・後に瓜生家を継ぐ）が生まれる。

瓜生家は、新潟県長岡市瓜生出身、赤崎長者とも呼ばれた瓜生出雲守の末裔。上杉影虎と景勝が争った天正六年（一五七八）の「御館の乱」で、影虎方であったことから、与板南の領地を追われ、熱塩温泉の示現寺を頼り会津に来た。示現寺を南北朝時代に再興した玄翁和尚は、瓜生家の旧領地、西側の山を越えた雲崎町小木野の小城野氏出身でもあった『新編会津風土記』に吉志田村に瓜生筑後重次の館跡があった。

母の嫁ぎ先若狭屋焼失事件

天保四年（一八三三）岩子五歳の時、会津地方は近年続いた飢饉に加え、この年は冷害となり、天保七年（一八三六）もひどい冷害となる。作物が実らず、今まで肉を食べなかったのに牛馬や犬猫まで食するようになるほどであった。翌天保八年（一八三七）の春、九歳の時、父が急病となり亡くなった。七月七日父の四十九日法要には、若狭屋山形支店の妹夫婦が子どもを連れて戻ってくる。五十日が過ぎ、姑の進もあり、叔母が住む上岩崎の飯島家へ母とともにお礼に泊まりに行った。すると、その夜、油屋が火事となり全焼、位牌や金も残っていなかった。姑は大風呂敷を担いで逃げたという。母が家の再興を姑に訪ねると、ていの良い離散を云うので、仕方なく親子三人瓜生家に戻ることにした。

若松城内で看護を学ぶ

天保十三年（一八四二）岩子十四歳の時、母に連れられ上三宮、願成寺参道右、田中琳碩（りんせき）という代々医者の家に養子に入った叔父の山内春瓏（しゅんろう）を訪ねる。春瓏は、当時、若松城下で殿様の侍医となり、産科、婦人科を専門とし、漢方薬にも秀で医者として上下の区別なく治療していたことから、人々から慕われたため若松城下大町に住んでいた。春瓏の弟子には、河東町駒板出身、長崎で学んだ蘭医古川春英（しゅんえい）がいる。野口英世初恋の人、若松最初の女医となった山内ヨネ（父は山内立真・夫は湖南の森川氏）は春瓏の孫にあたる。

上三宮願成寺脇に
山内家があった

会津若松大町1丁目の
山内ヨネの家跡

会津若松市宮町の「松葉屋跡」は、県立会津工業高等学校の北側にありました。△がその跡地。

熱塩温泉・示現寺

若松で会津戦争を経験 日本初のナイチンゲールとなる

春瓏は、岩子に「嗜みは上品、化粧はお化」といい、その意味を母に聞くよう諭した。岩子に「日々に行ないを慎み、日々によく働け」といって書斎に入ると岩子は一礼して下がった。机には、春瓏の実家、上三宮願成寺と同じ宗派、浄土宗経典「観無量寿経」が置かれていた。この時、叔父の治療方法や経験が、岩子に大きく影響する。

高田の佐瀬茂助と結婚そして破産

弘化二年(一八四五)岩子十七歳、春瓏の世話もあり、若松城下きっての呉服店、上町の大黒屋七郎右衛門に奉公していた会津高田竹原出身佐瀬茂助(もすけ)と結婚。大黒屋から横三日町(会津若松市宮町)に呉服店「松葉屋」を出してもらい手が回らぬほど繁盛した。嘉永二年(一八四九)には、長女つね子、嘉永四年(一八五一)長男祐三(後に岩子の弟半治の養子となり山形屋を継ぐ)が生まれる。翌年二女のとよ子が生まれている、店は、番頭一人に小僧三人、蔵も建てるほどとなった。

ところが、安政三年(一八五六)の春、岩子二十八歳の時、夫茂助が病気にかかる。その時、岩子には、三女の止女(とめ)子が生まれ喜んでいた。番頭は、娼婦の子であったがよく店を切り盛りしていた。しかし、いつしか店の反物を持ち出すようになり、越後から来た女と金を待ち出し逃亡したのであった。そして、茂助の病気は叔父春瓏の治療の甲斐もなく治らず、翌安政四年(一八五七)には、親と慕う春瓏が病気で閏五月二十日亡くなった。安政六年(一八五九)には、夫の看病をしながら働いていた岩子に対し、会津藩主は貞女の褒美をしている。しかし、文久二年(一八六二)三十四歳の時、夫茂助が亡くなってしまった。翌文久三年(一八六三)には、母りえも死去してしまった。そのため、岩子は、熱塩の瓜生家に身を寄せた。

三十五歳の時、母の菩提寺の示現寺隆覚禅師に「つそ尼になりたい」とその心境を伝えたると、隆覚(りゅうかく)禅師は、岩子を一喝「世の中にはお前より不幸な人は大勢いる。お前のこれからの一切を、もっと不幸な人のためにささげなさい。情けの全てをかけなさい。お前は他人の喜びを自分の喜びとすることができる人だ」「そのままの気持ちで目の前の苦しむ子供たちを助けなさい。それこそが真の菩薩行である」と諭される。

会津戦争で両軍兵を治療

その後、岩子は奮闘し、長女つね子は、若松城内の照姫に奉公へ出し、長男祐三は、家老西郷頼母の一族で、若年寄となり七百石となった西郷勇左衛門近潔(葵高校)の小姓になった。慶応三年(一八六七)十二月、十七歳の祐三は、勇左衛門とともに加賀へ行くが、翌年鳥羽伏見の戦いが始まると、勇左衛門は京都へ急ぎ、祐三は会津に帰ってきた。

慶応四年(一八六八)八月二十三日、西軍が若松城下へ侵攻した際、岩子は北方にいて、急ぎ塩川へ向かった。すると桑名藩兵ら四・五百人が隊列を組み、藩主松平定敬(さだあき)が米沢を目指す姿を目に し、湯と水、炊出しの世話をする。その夜、塩川にいた萱野権兵衛隊三百人の兵隊の最後に付いて神指の高久へ向い、そこに会津藩の山内遊翁隊がいた。

明治二～三年長男祐三が捕らわれていた東京の騎兵隊屋敷跡。東京都千代田区神田錦町付近。

八月二十五日、娘子軍が戦った時、集結した会津若松神指町の高久代官所跡。岩子も治療に行く

明治五年、東京浅草の救養会所跡。現浅草千足小学校付近

二十五日夜、義経袴に薙刀(なぎなた)を持つ女軍も協力。教科や内容は、だいたい藩校日新館と同じが戻り、中野竹子が戦死したことを聞くと直ちに、であった。戊辰・会津戦争一周期にあたる八月二三仮宿所(高久)を訪ねた。衣服は、血潮に染まり、薙日、岩子は小田付の満福寺に各宗派の僧侶を集め、刀には血が付き、竹子の母こう子は、竹子の首を合同法要をしている。明治三年三月七日、岩子は葬った後、薙刀に短冊を付け仮宿所へ戻って来た。民生局に呼び出される。すると「毎日感じ入る次

翌二十六日、岩子は総大将萱野権兵衛に諭され、第あり、詮議の上褒美を下し置かれる」として、折坂下から北方へ(避難するようにいわれる。岩子は、封の書状と金一両が渡された。明治四年、四十三北方へ向かう。避難した婦女子を家に受け入れ、敵歳、会津藩は斗南藩への移封が命じられ、明治五年味方の区別なく看護をした。飯沼貞吉の話を聞き(一八七二)教育法令が発布されると、藩士の子も見舞いに行く。岩子は、会津藩兵だけでなく、西軍移動し、岩子の幼学校も閉ざすこととなった。の傷病兵も放置せず、傷兵の介抱に努め　敵も味方もない。怪我人は怪我人です」、怪我をした人は皆同じ、国の為に戦っているのです」といい、その働きは、西軍の東山道先鋒総督府参謀土佐藩板垣退助(明治元年藩陸軍総督・会津藩名誉回復に努める)の耳にも達するほどだった。

若松城籠城戦での戦死者(約一五〇人)は、札を付けて二ノ丸の井戸に投じられ、二十人余は長持に合装して二ノ丸に埋められるほどだった。岩子の弟半治は、敗戦後、会津藩の勝(正)奇隊に属していたため塩川で謹慎となり、後に越後高田送りとなっている。岩子は、戻ると避難した婦女子を我家や近隣の農家に案内し、食料を集め、配給をした。

戦死者一周忌法要を満福寺でする

そして私財を投じて夜具や布団を調達した。岩子は、民政局の出張所が北方に作られると、藩士の子どものために学校を造ることを懇願したが、なかなか聞き入れられなかった。そこで、岩子は、長男祐三を呼び「切腹してまで訴えろ」と民生局への交渉依頼、民生局監察方兼断獄福井藩士久保村文四郎(明治二年、東松峠で伴百悦ら四人に暗殺)に頼み込んでようやく許可が下り、稲村の村岡庄吾を説得して小田付の川端に「日新館」と名づけた幼学校を建てるのであった。佐川又二郎(官兵衛の伯父)

浅草に行き救済・慈愛を学ぶ

祐三は、東京神田橋門外、騎兵屋敷音春屋に囚われの身となっていたが、その時、御飯や炭も渡され、母岩子と同じ貧民救済の考えを持つ人が東京深川にいる事を知る。それを岩子に報告すると会津の貧民を救い、孤児養育をすることに決心した。

明治五年十月、岩子は東京へ上ることを決めた。途中、若松では、若松城の城門は傾き、楼閣も潰れそうになっていた。十六橋の戸ノ口から舟で湊の崎川へ渡り、黒森峠から白河へ向かった。途中、山賊に襲われるが岩子は逆に投げ倒した。岩子は、古河藩下屋敷に佐倉藩大塚十右衛門が救養会所を設置していたので訪ねますが、そのころの救養会所は、浅草寺の北西側、浅草・千足小学校付近にありました。そこでは、孤児や老病の病者を救っていたもので、岩子は、大塚氏より指導を受け、大いに感銘を受けた。翌明治六年三月、会津へ帰郷した。旅費がなかったので、干物の魚を多く仕入れ、それを売りながら旅費に充てている。

岩子が、裁縫所を開いた喜多方市の長福寺。三十三観音講の集まりで、岩子は女性たちに自立を説得した。

明治34年、女性初の銅像となった瓜生岩子・浅草寺

明治六年、北方の岩崎村長福寺を飯島氏に頼み、尼寺に定め救養会所とした。岩子は、寺々を回り観音講に入り、若い女性に堕胎矯風を教え、間引き習慣を改めさせた。そして、寺では裁縫と機織を教えて給金を出し、貧困の女性は寺に泊めた。すると誰となく「仏の岩子」と呼ぶようになった。明治三年には、福島県令山吉成典、十五年には三島通庸、十八年には赤司欽一から賞与を受けている。明治二十年(一八八七)五十九歳、福島渡、長楽寺脇の長屋へ移る。明治二十一年(一八八八)磐梯山大噴火では、救護活動をする。

帝国議会に女性初の請願をする

明治二十二年十二月、福島に私立福島救育所の建設許可が下り設置した。明治二十四年(一八九一)三月六十三歳、渋沢栄一の要請により上京し、東京養育院幼童世話係長(千代の富士部屋の場所)を八カ月勤務する。六月には、明治天皇の皇后陛下より菓子を賜る。喜多方、坂下には育児会でき、喜多方には産婆研究所を設立し、明治二十六年(一八九三)六十五歳、済生病院を若松に設ける。この時、野口英世の母しかは岩子より産婆を習っている。また第一回国会において女性初の請願書「婦女慈善記章の制」を提出し、婦人の活躍を願った。明治二十七年八月には、東京都台東区根岸に移り、日清戦争の傷病兵救済ため、飴の糟を利用して糟餅やパンを作り、さつまいも屑を使用して水飴を作り、捨てられるものを利用しての食品を考案。東京下谷に「福島瓜生会支部水飴伝習所」を設立し、水飴三十缶を寄贈している。明治二十八年には、東京に瓜生会を設け、日清戦争での戦死者夫人三千人に対し、銀杯と紀念織を送っている。

女性初藍綬褒章を受ける

明治二十九年五月十一日六十八歳、女性初の藍綬褒章」を受ける。この時、会津弁との通訳が必要となり、宮中でフランス語を教えていた山川捨松の姉操が皇后との通訳をしている。その年、三陸津波被災者のためのバザーや募金を行っている。翌三十年一月、心臓病をわずらい福島に戻り明治三十年(一八九七)四月十九日、福島で六十九歳の生涯を閉じる。**亡くなる二日前には、明治天皇の皇后陛下が見舞いに訪れたことに感謝し**

老いの身の　なかからさりし命をも　たすけたまへる　慈悲のふかさよ」

と詠んだ。熱塩の示現寺、本堂西の裏山に墓がある。明治三十四年四月、土方久元(土佐)、三島通庸夫人らによって浅草の浅草寺本堂西に岩子像が建てられる。

参考　『瓜生岩子』奥寺龍渓、四恩瓜生會　明治四拾四年六月刊

女性初の藍綬褒章を受賞

明治十四年(一八八一)十二月七日、太政官布告第六十三号「褒章条例」を制定。当初は、紅綬褒章・緑綬褒章・藍綬褒章の三種。明治十五年一月一日施行。

○紅綬褒章(こうじゅほうしょう)「自己の危難を顧みず人命の救助に尽力したる者」に授与される。

○緑綬褒章(りょくじゅほうしょう)「自ら進んで社会に奉仕する活動に従事し徳行顕著なる者」に授与される。

○藍綬褒章(らんじゅほうしょう)「教育衛生慈善防疫の事業、学校病院の建設、道路河渠堤防橋梁の修築、田野の墾闢(開墾)、森林の栽培、水産の繁殖、農商工業の発達に関し公衆の利益を興し成績著明なる者又は公同の事務に勤勉し労効顕著なる者」に授与される。

明治24年、東京養育院跡。現千代の富士部屋

示現寺裏山の瓜生岩子之墓

福島市長楽寺の岩子像